

# 大槻文彦著『東京須覧具』と『日本 辞書言海』

田鍋 桂子

【キーワード】 『言海』 『大言海』 東京語 隠語 普通語

## 1. はじめに

『日本  
辞書言海』(以後『言海』と呼ぶ)は、大槻文彦(1847-1928)によって編纂された明治期国語辞書である。大槻は文部省より辞書編纂の命を受け、14年にわたる編纂作業を経て、『言海』(1889-1891)を私版として刊行した。その編纂過程の一端は、宮城県図書館所蔵の稿本(1886頃成稿)によってもうかがえる。その後、大槻は『言海』の増補改訂に着手したが、編纂中に死去し、『大言海』(1932-1935)は、残された原稿をもとに刊行された。

先年、大槻の手になる『東京須覧具』(1890-?)の存在が明らかになった。この『東京須覧具』は、東京の俗語を中心とする一種の備忘録的な語彙集である。田鍋(2002)では、その書誌および『言海』・『大言海』との関係について一部を調査し<sup>1)</sup>、『東京須覧具』が両辞書の編纂資料の一つであることを指摘した。

『言海』は近代国語辞書の先駆的存在であるとともに、明治期日本語資料としても重要であり、成立過程や収録語彙について、これまでも山田(1981)、湯浅(1997)、犬飼(1999)など多くの研究がなされてきた。しかし、東京語という点からは、特に研究はなされていない。『東京須覧具』は、表題から見ても『言海』における東京語の収録方針について何らかの示唆を与えるものであろう。

本稿では、『言海』の語彙の様相と収録方針を明らかにするための一つの試みとして、『東京須覧具』所収の語について検証を行い、『東京須覧具』から『言海』・『大言海』への採録語彙について分析を行う。以下に、調査対象とした4種の主要資料およびその依拠文献を掲げる。そのほかの辞書類等の調査資料については、稿末に記した。

『東京須覧具』1890-?(国立国会図書館蔵)

稿本『言海』1875-1886(複製『稿本<sup>日本  
辞書</sup>言海』、大修館書店、1979)

私版『言海』1889-1891(複製『私版<sup>日本  
辞書</sup>言海』、大修館書店、1979)

『大言海』1932-1935(富山房)

## 2. 『東京須覧具』の言葉

『東京須覧具』は、大槻文彦が「東京」の「須覧具(スラング)」として収集した、延べで2709語、異なりで2542語の語彙集である。『東京須覧具』には、田鍋

(2002)で述べたように、形が崩れた語や、特殊な集団で秘密保持のために使用される隠語も含まれるが、いわゆる「スラング」より広範囲の話し言葉が収録されている。本稿では、『東京須覧具』の語彙を秋永(2004)の『東京弁辞典』と対照し、これらの語彙が東京弁<sup>3)</sup>であるか否かを検証した。調査に際し、同語認定の基準は、語形と意味が完全に一致した語に限り、以下のような場合は不完全一致として別に集計した。

①『東京須覧具』と『東京弁辞典』で見出し語の語形が相違する場合

例 けえけ(『東京須覧具』)↔けえけえ(『東京弁辞典』)

ごんぼっち(『東京須覧具』)↔ごんぼうじ(『東京弁辞典』)

②語形の一部が一致する場合

例 いれかえ(『東京須覧具』)↔いれかえもの(『東京弁辞典』)

げげのげ(『東京須覧具』)↔げげ(『東京弁辞典』)

③同語形が『東京弁辞典』に存在するが、『東京須覧具』には見出し語のみが記載されているもの

調査の結果、『東京須覧具』所収の語で、『東京弁辞典』の見出し語と、語形と意味が完全に一致した語は567語であった。『東京須覧具』所収の語中、約20パーセントは東京旧市域で使用されていた東京弁であるといえる。また、上記の①②③のような語も含めると1042語が『東京弁辞典』に記載されており、最大で40パーセントが東京弁と認められることになる。

人称代名詞について例を挙げると、『東京須覧具』には以下の15語がおさめられている。下線を施した語は『東京須覧具』に見出しのみ掲載されている語である。なお、「あたし」は「あいら」の欄上、「おれ」、「おら」は「おれっち」の欄上にそれぞれ記されている。「㊦」が付された語が、『東京弁辞典』に東京弁として記載されている語である。

あいら あたし㊦ あたい㊦ あっし㊦ うぬ㊦ おいら㊦ おれっち おら  
おれ てめっち㊦ てめへ㊦ わっち㊦ わたい㊦ わちき

東京弁であると確認できなかった語を『日本国語大辞典』(第二版、以下同じ)で調べてみると、「おれっち」<sup>3)</sup>は明治以降の用例のみが挙げられていた。「あいら」、「おら」は、式亭三馬の戯作の例が挙げられ、江戸期の使用が確認できる。「おれ」も江戸期から明治に至るまで広く用いられた語であるが、『東京弁辞典』では、斉藤(1935)の編になる『東京方言集』所収の「江戸川区の方言」を引用している。「わちき」は遊女が用いた語である。

その他、方言にかかわる例として、「がんばる」がある。『東京弁辞典』は「がんばれ」の形で掲出し、『東京方言集』の「我張ル」という東北方言由来の説<sup>4)</sup>を引用した上で「東京弁というわけではない」とする。『大言海』には「我意ヲ張

ルノ口語」とある。『日本国語大辞典』の「がんばる」の用例は、江戸後期から明治初期まで「見張りをする」、「頑強に座を占める」という意味が挙げられているが<sup>5)</sup>、『東京須覧具』では見出し語のみの掲出であるため、いずれの意味なのか判断としない。しかし、このような語が『東京須覧具』の中に含まれていることは注目される。

『東京須覧具』には上記の他にも、「かくべくヲリカヘシ 倍」や「どるだんく弗旦」<sup>6)</sup>のように『日本国語大辞典』に見出し語として挙げられていない語もあり、これらは当時の流行語や話し言葉である可能性が高い。また、「しうとく舅飼犬 盗賊ノ隠語」、「せんじゅくわんおんく千手観音 蛸 僧家ノ隠語」のような特殊な集団で使用された隠語なども見られた。なお、くくの部分には『東京須覧具』に記された注釈である。

以上、『東京須覧具』の語彙の約半数は、東京の旧市内で使用されていた形跡のある語であるが、「わちき」、「しうと」のような特定の身分、職業の人物が使用していた語や、「がんばる」のような生粋の東京弁とは言いがたい語も見られる。しかし、全体からみると、『東京須覧具』には東京旧市域で使用されていた語が多数収録されているところから、東京方言の資料として一定の評価ができよう。

### 3. 『東京須覧具』と稿本『言海』・私版『言海』・『大言海』

3では、『東京須覧具』の語彙が、稿本『言海』・私版『言海』・『大言海』にどの程度収録されたのか<sup>7)</sup>を量的な側面から考察する。

『東京須覧具』所収の語と、稿本『言海』・私版『言海』・『大言海』とを対照させた結果を〈表1〉に示す。

〈表1〉『東京須覧具』から稿本『言海』・私版『言海』・『大言海』への採録語数

書名	内訳	異なり語数	延べ語数
稿本『言海』	見出しにある語	609	662 語
	語釈中にある語	32	33
	計	641	695
私版『言海』	見出しにある語	516	551
	語釈中にある語	35	36
	計	551	587
『大言海』	見出しにある語	1421	1534
	語釈中にある語	136	136
	計	1557	1670

〈表1〉によると、『東京須覧具』の異なり語 2542 語の中、稿本『言海』・私版『言海』には 20 パーセントほどが、また『大言海』には半数以上が採用されてい

る。『東京須覧具』は、語数からみた場合、『言海』よりも『大言海』に多くの語が所収されている。しかし、私版『言海』の収録語数は 39,414 語、『大言海』の収録語数はその約 2.5 倍の 98,006 語<sup>8)</sup>であり、収録率は両辞書ともに 1.5 パーセント程度である。この数字は小さいが、『東京須覧具』の語彙が、稿本『言海』から『大言海』に至るまで採録されたということは明らかであり、大概は、東京弁及び東京という地域に限り使用された語彙を、一つの語彙の分野として明確に意識し、収めようとする意図があったことが指摘できる。

〈表 2〉は、『東京須覧具』所収の語で、稿本『言海』では見出し語として記載されているにもかかわらず、私版『言海』では削除された語数とその比率である。

〈表 2〉『東京須覧具』所収の語の稿本『言海』から私版『言海』に至る削除語数

第 1 巻から第 3 巻までの削除語

行	『東京須覧具』中稿本に記載されている語数	削除語数	削除率	第一巻～第三巻までの削除率
ア	88	3	0.03	0.08
カ	103	3	0.03	
サ	79	7	0.09	
タ	90	15	0.17	

第 4 巻の削除語

行	『東京須覧具』中稿本に記載されている語数	削除語数	削除率	第四巻の削除率
ナ	61	16	0.26	0.42
ハ	117	70	0.60	
マ	62	23	0.37	
ヤ	38	9	0.24	
ラ	4	1	0.25	
ワ	6	1	0.17	

私版『言海』は 4 分冊で、第 1 巻（ア行）、第 2 巻（カ行・サ行の中の「サ」）、第 3 巻（サ行中の「シスセソ」とタ行）、第 4 巻（ナ行・ハ行・マ行・ヤ行・ラ行・ワ行）が順に刊行されたが、〈表 2〉において削除された語数を比べてみると、第 1 巻から第 3 巻までの削除率と、第 4 巻の削除率に違いが見られる。稿本『言海』から私版『言海』に至る削除に関して、山田（1979）は、辞書の後半部分に漢語、外来語、俗語の削除が多数見られることを指摘し、経費や印刷所の事情による刊行期日の遅延の問題など出版上の事情からやむなく削除せざるをえなかったのではないかと述べている（p.718）。本稿の調査により、『言海』に掲載予定だった『東京須覧具』の語彙が特に第 4 巻において削除されたことが指摘できる。

#### 4. 『言海』・『大言海』への採用方針

4 では『言海』（以下では「私版」を指す）・『大言海』への語の採用方針を明ら

かにするために、『言海』・『大言海』に採用された語、採用されなかった語の特徴を具体的に分析する。

分析にあたっては、第1巻所載の「あ」の項と第4巻所載の「や」の項の語を取り挙げる。動詞及び動詞で終わる句については語数が少ないので「あ行」、「や行」の語を挙げる。これは、3で述べたように、『言海』の第4巻は第3巻までと比べて採用語彙を限る傾向が見られるためである。「'」を付した語は、『日本国語大辞典』に見出し語、もしくは用例が掲載されていない語であり、「''」を付した語は、『日本国語大辞典』に明治以降の用例のみ挙げられている語である。「▽」は『岩波国語辞典』（第6版、2000）に収録されていない語を示した。

#### 『言海』のみに採用された語句

あてっこすり（→あてこすり） いごく▽

#### 『言海』・『大言海』に採用された語句

あすぶ▽ いきつく▽ うける うたぐる うっちゃる えばる▽  
おっこちる おっこつす をどる▽  
あいきょう あくどい あげ あし あしもと あつかは▽ あったかい▽  
あな あばた あま あめ あら▽（感動詞） あをた あんぼんたん  
あんも▽  
やきもち やくざ やじりきり やば やはず\*▽ やぶ（→やおいしや）  
やぼ やまくじら やまのかみ やらう

#### 『大言海』のみに採用された語句

あしだをはく▽ あたまをはる▽ いきうまのめをぬく いたす\*  
いただく▽ いはへる▽ うじゃける▽\*\* おんだす▽  
やっつける やぶく やふける（→やぶける） やらかす やる  
あいら▽ あけつばなし あご▽ あたし あたい▽ あたまごなし あたり  
あたりばこ\*\* あたりばち\*\* あたりめ\*\* あにい あねえ（→あねい）▽  
あばよ▽ あぶら あぶらむし▽ あめこんこん\*▽ あをだけのてすり\*\*▽  
あんこ\*\* あんよ▽  
やいのやいの（→やいの▽） やきもき やくて\*\* やけぼつくい やし  
やじうま やたいち▽ やっちゃば やどろく やほちやう\*\* やま  
やまだい▽ やまだし やりくり やりとり\*

#### 『言海』・『大言海』ともに採用されなかった語句

あきれかれいにくる▽ あげる\*\* あひるがぶんこしよふ\*▽ あふ  
あんちよする いいばかをみる\*▽ いけいけになる▽ いける

いちやつく いなる▽ いにいく\*▽ いらつく うけさせる▽  
 うしをうりそこなふ\*▽ うならせる▽ うんはてんにあり▽  
 ゑさをまく\*▽ えなをあらう\*▽ おきがつかれる▽ おきやあがれ▽  
 おだわる▽ おつかふ▽ おったてる▽ おったまげる▽ おっぼりだす\*\*  
 おとしやる▽ おみつてる▽\* おめでたくなる▽\*\* おりない▽  
よがる▽\* やきがまはる▽ やつかむ やつちまう▽\* やつちよる▽\*  
やってる▽\* やぶれだいこをたたく▽\*  
 あい▽ (鮎) あいし\* あいきようもの▽ あいまいや あかがひ▽  
 あがりばな▽\*\* あくしようもの▽ あくぬけ▽ あげしん\*▽ あげばこ\*▽  
あしばた\*▽ あせみじく\*▽ あそび▽ あたぼう▽ あたま\*\*▽ あだもの▽  
 あつあつ あっし\*\*▽ あてとふんどし\*▽ あてひき\*▽ あなッぱいり▽  
 あひかた▽ あぼちんたん\*▽ あまけもそっけもない\*▽ あまみ あらばち▽  
ありよる\*▽ あんにやもんにや▽  
 やかん やく\*▽ (役者) やけすけ\*▽ やけのやんばち\*▽ やこっぼい\*▽  
 やそう やぢ やっかいもっかい▽ やっこ\*▽ やっこさん やっぱし  
 やぶからぼう▽ やみ\*▽ やり▽ やんかんもの\*▽

上で下線を施した語は、『東京須覧具』に見出し語のみ掲出されているものである。したがって、『日本国語大辞典』で明治期以降にしか用例が見られないか否かの調査は行っていない(「」の表示をしていない)。

なお、『言海』・『大言海』の両方に同語形が存在するが、『東京須覧具』には見出し語のみが掲載されている語として以下の語がある。

あかぬける、あたる、あてはめる、あてられる、いのる、うだる、ゑぐる、  
 おじやる、おっこう、あかいわし、あかにし、あかんべい、あたじけない、  
 あたまわり、あぶく、あまのじゃく、あんまり、やけ、やせがまん、  
 やたらに、やつ、やっこ、やはやは、やみくもに、やりて、やんや

同様に『大言海』のみに同語形が見られる語を挙げる。

あとあしですなをかける、あをる、いりあげる、うっちゃらかす、  
 うつつをぬかす、うんじようする、えりもとにつく、をかぼれる、  
 おかまをおこす、おつつける、おひやらかす、おべっかる、おやかる、  
 おやける、あいっくるしい、あいづり、あいびき、あきすねらい、  
 あきっぱい、あけすけ、あせみづく、あだっぱい、あたふた、あたりいも、  
 あつけらかん、あばずれ、あべこべ、あほだらきよう、あまつちよ、  
 あをてんじよう、あをにさい、あんぐり、やすっぱい、やせぎす、

やっこらさ、やにっこい、やぶへび、やまかん、やまわけ、やろう、  
やんちゃ、やんちゃん、やせうで、やせじょたい、やせつぼし、やにつこい、  
やまだし

上の語の中には、現在でもくだけた場面で使われる語も見られ、意味も推定可能な語も多いが、ここでは取り上げない。

『言海』に採用された語句と採用されなかった語句を比較すると、語の収録方針が見てとれる。「やはず」以外の『言海』に採用された語句には『日本国語大辞典』に洒落本、人情本、滑稽本、落語、雑俳などの江戸以降の使用例が見られ、江戸期から広く使用されていたことがうかがわれる。これらの語句は『岩波国語辞典』に記載されている語も多く、現代でも生き続けていることがわかる。

一方、「いきうまのめをぬく」と言った慣用句、「あをだけのてすり」などの言語遊戯的な言い回し、「あたりばこ」などの忌み言葉は小型辞書という性格上、『言海』には採られにくいようである。また、花柳界の語や性的な意味を表す語などは長きにわたって使用されていてもほとんど採られることがない。これは辞書の規範意識であり現代の国語辞書でも同様である。

『言海』・『大言海』ともに収められていない語句の中には、『日本国語大辞典』に見出し語が立項されていても、用例が挙げられていない語（「あひるがぶんこしよふ」、「あまけもそっけもない」、「やけすけ」）がある。また、『日本国語大辞典』に語句が見出し語として立項されていない語も見られる。これらの語の中には、「おみつてる（←お神酒）」、「をだはる（←小田原）」のように名詞に「-る」をつけて動詞化した造語や、「やっこ」、「やみ」のように、『東京須覧具』によれば、八百屋、人力車夫の使用する貨幣単位の隠語など、使用者や使用範囲が限られる語も含まれている。

その他、『日本国語大辞典』に明治期以降の用例のみが挙げられている語句<sup>9)</sup>についても、『言海』は採用していない。これらの語句のうち、『日本国語大辞典』に『言海』が出版された1889年以前の用例が確認できるのは、「うじゃける」、「おめでたくなる」のみである。一般に、新語が小説などの文献の上に現れるのは、話し言葉においてかなり定着した後であり、新語の発生と辞書の記載の間に時間的に隔たりがあることを考慮すると、『言海』編纂時に使用されていても、収録は時期尚早と判断されたという可能性もあろう。『大言海』に比して小型辞書である『言海』は、比較的新しい語句の採用を避ける方針があったものと思われる。

上記の例以外に、『東京須覧具』に所収の語で、『言海』に採用されなかった特徴的な語に、「です」、「でげす」がある。

『東京須覧具』には、両語とも見出し語のみ掲出されており、「です」は「ですよ」の形で挙げられる。「です」については、これまで中村（1935）、辻村（1965）、松村（1990）などさまざまな研究がなされ、この語は、江戸中期から幕末にかけ

て、男伊達や通人など特定の男性から遊里関係の女性に広がり、明治以降は、洋学会話書などでの使用例も目立つようになるという。また、「でげす」は、江戸末期から明治にかけて芸人、職人、通人の間で用いられた語である。

大槻は『口語法別記』の中で、「です」について、「でげす」と同様に芸人言葉であり、商人を含めて江戸の身分ある人々は使用しなかったと述べ、語感の卑俗さを強調した (pp.297 - 298)。しかし、長崎 (2001) は、身分や立場の違いによって「でげす」の位相や語感のとらえ方が大きく異なるとしている (p.42)。

大槻は武家出身の知識人という立場からこの語を捉えていると考えられ、『言海』で、「です」、「でげす」を採用しなかったのは、出自や使い手が辞書の見出し語としてふさわしくないと判断したためであろう。しかしながら、『大言海』に至って「です」は見出し語にたてられることになる<sup>10)</sup>。これは、明治後期には「です」が広く普及したため、見出し語に立てないのは実情にそぐわないと判断したためであろう。

## 5. 東京の方言と『言海』

『言海』には、『東京須覧具』に収められている語以外にも東京で使用された語が見られる。そこで、『東京方言集』所収の「旧市域の語彙」について、『言海』に収められているか否かを調査したところ、「旧市域の語彙」所収の 2039 語のうち 326 語が『言海』に収められており、このうち『東京須覧具』に出現しない語は 286 語であった。4 と同様の範囲で例をあげる。

アタケル イスブル イタブル イタメツケル イビル ウケコム  
オソナワル オヒンナル オヨル  
アシガラ アッケナイ アツボッタイ アッタラ アテコト  
アトビッシャリ アマイ アラレ アリヨー アワオクー アンコロモチ  
ヤノアサツテ ヤバイリ

このうち、「アツボッタイ」と「イスブル」<sup>11)</sup>は『日本国語大辞典』に明治以降の用例のみが挙げられているが、それ以外の語は、すべて江戸期の用例が挙げられており、江戸時代から継続して使用されている東京弁であるといえる。

しかしながら、「ヤノアサツテ」に関しては「旧市域の語彙」で明々々後日の意味であるとされている<sup>12)</sup>のに対し、『言海』では以下のように記述されている。

しあさつて 明明後日 やのあさつてノ條ヲ見ヨ。

やのあさて 明明後日〔彌ノ明後日ノ義〕今日ヨリ、間二日、隔テテ来ム日。

ヤナアサツテ。大後日 東京ニテハ、コレヲ、しあさつてトイヒ、其翌日



ヲ、やなあさつてト誤り呼べり。  
みやうみやうごにち 明明後日 ヤノアサテ。

『言海』とほぼ同時期に刊行された『日本大辭書』(1892-1893)でも、「ヤノアサッテ」は明明後日の意味であるとする。また、「ヤノアサッテ」に「古語・癡語」を示す位相注記を付し、「シアサッテ」と同義だとも述べている。

「アサッテ・シアサッテ・ヤノアサッテ」については、東京における新しい体系であるとする説が一般的である。国立国語研究所(1974)の『日本言語地図』第6巻の「各図の説明」によると、東京の「アサッテ・ヤノアサッテ」に明明後日を意味する上方のシアサッテが侵入して、すでに東京あったヤノアサッテと衝突した結果、ヤノアサッテは「明明後日」の意味になり、もしくは消え去ったとされる(pp.75-76,『解説』)。また、佐藤(1975)にも同様の記述がある(p.35)。

柴田(1958)は、東京には、共通語でもある「アサッテ・シアサッテ・ヤノアサッテ」とともに、「アサッテ・ヤノアサッテ・シアサッテ」という体系があり、下町の言語話者に「アサッテ・ヤノアサッテ・シアサッテ」の体系を持つ人がいるという(pp.2-7)。『日本大辭書』の編纂者である山田美妙は、母親が江戸の町医者の娘であり、神田で生まれ育った。美妙の「アサッテ・ヤノアサッテ」は柴田が指摘した下町の体系と一致する。

これらのことから、「アサッテ・シアサッテ」は、『言海』の編纂時期である明治前期には比較的新しいと意識されるところがあり、使用者は地方流入者の多かった山の手の人々ではないかと推測できる。『言海』は、より古い形の「アサッテ・ヤノアサッテ」を標準として採用し、地方から流入した「アサッテ・シアサッテ」を東京弁ではなく誤りとしたのではないだろうか<sup>13)</sup>。

これらはわずかな例であるが、4の『東京須覧具』から『言海』への採録語に見られた傾向と同様に、大槻文彦が語の出自と語の定着の両方を慎重に検討しながら、見出し語を選択していった様子がうかがえる。

## 6. まとめ

これまで『東京須覧具』の語彙と『言海』への収録語について考察してきた。『東京須覧具』は通常の「スラング」より広範囲の語を扱う語彙集であるが、東京旧市域の言葉や、江戸・明治期に東京で使用された形跡のある語が多く見られ、稿本『言海』から『大言海』にいたるまで継続的に収録されている。これは、東京の言葉を一つの分野として辞書へ採用しようとする大槻文彦の意図のあらわれだと考えられる<sup>14)</sup>。

『東京須覧具』の語彙の『言海』への収められ方を見ると、江戸期より使われた語や、現代でも生き続けている語が見られる反面、『大言海』との比較の結果か

ら、明治期以降に新しく使用された可能性のある語は収められにくい傾向が指摘できた。これは、『言海』が小型辞書であり、広く使用され定着している語を厳選しておさめようとする意図があったためだと考えられる。一方、江戸時代から使用され人口に膾炙していると思われる語でも、収められない語が見られた。それは現実をありのままに映すというより、辞書として日本語の規範を示すという姿勢があったためであると思われる。

『言海』は「本書編纂ノ大意」の(一)で、広く「普通語」を採用することをうたい、「凡例」の(一)において、「今言」、「俗言」、「方言」、「俚言」なども「通用語」であるものは皆おさめたとするが、いかなる語が「普通語」、「通用語」であるかについてはいまだ明らかではない。しかし、今回の調査で見た『東京須覧具』から『言海』に取り上げられている東京弁は、大槻の意識の中で「普通語」、「通用語」として選定された語にほかならない。

「普通語」の一部を占めるこれら東京弁は、語の定着、意味、出自や使用者などが厳しく吟味されたはずである。そこに見られるのは、あるべき日本語を求める姿勢、言い換えれば、公の意識である。ことに出自、使用者、使用地域に関する選択意識は『口語法別記』にある「東京の教育ある人の言葉を目当に」(p.2)定められていく後の標準語制定の態度と似通うものがある。

辞書には古語を含めた書き言葉が多く取り上げられるため、標準語の制定とは直接関係がないように思われるが、今回取り上げた語の多くは日常生活の中で用いられる東京の語であり、標準語そのものではないにせよ、他の分野の語彙よりも標準語へと関っていくもので、『言海』から『口語法別記』への一つの道筋が見られると思われる。

以上、『東京須覧具』の語彙と『東京須覧具』から『言海』に収録された語彙について分析を行ったが、『東京須覧具』の個々の語については調査が不十分であり、他の明治期国語辞書における東京弁や選択方針については分析が及ばなかった。また、「普通語」に関してはまだその一部に触れたにすぎない。これらは今後の課題としたい。

#### 注

- 1 『東京須覧具』中「言海」という注記があるものについて私版『言海』及び稿本『言海』との対照調査を、また『東京須覧具』のあ行の語彙のみ『大言海』との対照調査を行った。
- 2 秋永(2004)は、江戸墨引内にはほぼ相当する東京旧市内(旧十五区)生育者の言葉を「東京方言」或いは「東京弁」と呼んでいる(p.658)。本稿では秋永(2004)の基準に従う。
- 3 『日本国語大辞典』におけるもっともはやい用例は、三宅花圃(1888)の『藪の鶯』である。

- 4 『東京方言集』所収の永田吉太郎、斉藤秀一編「旧市域の語彙」に「金田一先生談」とある（復刊、p.187）。
- 5 『日本国語大辞典』において、現在の「がんばる」という意味の用例は、サトウハチロー（1944）の童謡が最も早い時期のものである。
- 6 木村（2000）によると「かくべ」は「かくべえ」として見出しに挙げられ、「五分の利あるをいふ。『をり』に同じ、角兵衛が、そっくり反りて両手を地に著く時、体が二つに折畳まるを以て喩へていふ也。『東京語事典』1917）」（p.254）、「どるだん」は「芸妓、娼妓などが金銭などの供給を仰ぐ旦那。『秘密辞典』1920）」（p.879）とある。また正岡（1957）によれば「横浜ことばで、貿易商などドルをかせぐ金持ちのこと。芸者の旦那のこともいうことがある」（ちくま学芸文庫版、p.163）と記されている。
- 7 大槻文彦は『大言海』編纂作業中にあ行、か行、さ行の成稿と多くの筆記抄録を残して死去したが、『大言海』の緒言によれば、語句の採集については1919年の暮れまでにい、翌春より原稿の整理にとりかかったということから、見出し語の選定はある程度完成していたと考えられる。
- 8 『言海』の数値は田鍋（2000）により（pp.53 - 54）、『大言海』の数値は犬飼（1999）によっている（p.714）。
- 9 いくつか例を挙げると、『日本国語大辞典』における最も早い用例として、「あげる」は三代目柳家小さんの落語『蹴め』（1896）、「あっし」は徳田秋声の『新所帯』（1908）、「いなる」は泉鏡花の『湯島詣』（1899）、「うじゃける」は『改正増補和英語林集成』（1886）、「おっぼりだす」は泉鏡花の『日本橋』（1914）、「おめでたくなる」は三遊亭円朝の『真景累ヶ淵』（1869頃）が掲出されている。
- 10 注7を参照のこと。
- 11 「アッポツタイ」は、龍胆寺雄『放浪時代』（1928）が『日本国語大辞典』におけるもっともはやい用例である。「イスブル」は、『日本国語大辞典』も『東京方言集』と『言海』のみしか挙げていない。また、『大言海』には、東京の発音は「ゆずぶる」であると注記されており、調査が必要である。
- 12 『東京弁辞典』は「旧市域の語彙」を引用し、都区内は明明々後日の意としている。
- 13 なお、『大言海』では、「しあさって」は明明後日の意であり、「やのあさって」は「彌明後日」（明明明後日）の意味であると記されている。東京の誤りであると指摘した『言海』の記述は削除されている。『大言海』の記述は、大槻が全てを完成させたわけではないが、注7に述べたことから、大筋において大槻の記述を反映していると考えられる。この問題は東京における「シアサッテ」の歴史的な伝播の問題や大槻の言語環境等も関ってくると考えられるが、別途稿を改めたい。
- 14 東京以外の方言と『言海』との関係については田鍋（2003）で述べた。東京の言葉に比べると、各地の方言は数が少なく、また物の異名が圧倒的に多いのが特徴的であった。今回取り上げた語は物の異名は少なく、日常会話に出てくるようないわゆる生活語彙が多く収められているところから、他の地方と比べても東京弁を積極的に採用

しようとしたことがわかる。

## 文献

### 【資料】

- 秋永一枝編 (2004) 『東京弁辞典』 東京堂出版  
木村義之編 (2000) 『隠語大辞典』 皓星社  
国立国語研究所 (1975) 『日本言語地図』 (第6巻) 大蔵省印刷局  
斉藤秀一編 (1935) 『東京方言集』 喜峰社 (国書刊行会 1976 復刊)  
西尾実他編 (2000) 『岩波国語辞典』 (第六版) 岩波書店  
日本国語大辞典第二版編集委員会編 (2000) 『日本国語大辞典』 (第二版) 小学館  
正岡容編 (1957) 『明治東京風俗語事典』 有光書房 (ちくま学芸文庫版 2001)  
山田美妙 (1892-1893) 『日本大辭書』 日本大辭書発行所 (大空社 1998 復刻)

### 【著書・論文】

- 犬飼守薫 (1999) 『近代国語辞書編纂史の基礎的研究ー『大言海』への道ー』 風間書房  
佐藤亮一 (1975) 「言語地図からみた『しあさって』と『やのあさって』」 (『言語生活』 284)  
柴田 武 (1958) 『日本の方言』 岩波書店  
田鍋桂子 (2000) 「『<sup>口</sup>言海<sup>口</sup>』の語種ー外来語を中心にー」 (『日本語論叢』 1)  
田鍋桂子 (2002) 「国立国会図書館蔵『東京須覧具』について」 (『日本語論叢』 3)  
田鍋桂子 (2003) 「方言よりみた『<sup>口</sup>言海<sup>口</sup>』の編纂態度」 (『日本語論叢』 4)  
辻村敏樹 (1965) 「『です』の用法ー近世語から現代語へー」 (『近代語研究』 第1集、武蔵野書院)  
長崎靖子 (2001) 「明治期速記資料にみる『です』」 (『日本語論叢』 2)  
中村通夫 (1935) 「『です』の語史について」 (『國語と國文學』 13 3) (『東京語の性格』 1948 川田書房)  
松村 明 (1990) 「明治初年の洋学会話書における助動詞『です』とその用法」 (『近代語研究』 第8集、武蔵野書院)  
文部省 (1917) 『口語法別記』 國定教科書共同販賣所  
山田俊雄 (1980) 「稿本『言海』の刊行について」 (『稿本<sup>口</sup>言海<sup>口</sup>』 第三巻、大修館書店)  
山田忠雄 (1981) 『近代國語辭書の歩みーその模倣と創意とー』 三省堂  
湯浅茂雄 (1997) 「『言海』と近世辞書」 (『国語学』 188)

## 謝辞

『東京須覧具』については一関市博物館の小岩弘明氏のご教示によってはじめてその存在を知った。ここに改めて記し感謝の意を表したい。